尹明斎の為己之学の特性とその現代教育的意義

李　致億

はじめに

本稿は、尹拯（ユンジュン）（号：明斎、一六二九～一七一四）の学問論とその実践様相を分析し、その教育的意義を探究することを目的とする論文である。孔子が「為己之学」[1]の概念を提唱して以来、儒学はこの為己之学のみを真の学問の典型としてきた。したがって、名声が後世に伝わるような前近代の大儒であれば、基本的には為己之学に従事していたと推測することができる。そのなかでも、一生にわたる学問的歩みから見て、最も為己之学に忠実であった学者の一人として尹明斎は代表的である。彼は科挙にまったく目を向けなかったのみならず、推薦によって与えられた官職にも一切応じないほど官界と距離を置いた。生涯にただ一度だけ朝廷に赴こうとしたことがあったが、その時でさえ道中で引き返し、その後八十六歳で世を去るまで郷里を離れることがなかったのである。官職と学問に対するこのような態度は、透徹した為己之学の精神を抜きにしては説明しがたいであろう。

一見すると、一人の学者における為己之学の特性を叙述することは、必ずしも適切とは思われないかもしれな

い。為己之学は、ある種の独自の思想概念ではないため、一人の学者がそれについて独立した見解を表明すべき性質のものではないからである。したがって、ある一学者における為己之学の特性を論じるためには、その思想的内容よりもむしろ、その生涯において置かれた環境と内面的な苦悩、生活の遍歴と気質的傾向を合わせて観察することが必要となる。すなわち、「彼にとって学問とはいかなる意味を持ったのか」「彼はなぜそこまで徹底して官職を拒み、学問に没頭したのか」「彼は学問を通して何を成し遂げようとしたのか、またそれを実現しえたのか」といった問いに答えようとすることが、本論文の第一の目的である。

本稿は、このような問題意識に立脚し、明斎の為己之学の動機を、彼が幼少期に経験した「精神的痛み」に見いだすところから出発しようとするものである。すなわち、明斎の徹底した為己之学の精神の背後には、解決せずにはおかれなかった痛みが作用していたと捉え、それがいかなる形で徹底した学問へと昇華されたのかを考察したい。そのことを通じて、彼の学問が、今日の「痛みの多い」現代人に対していかなる示唆や教訓を与えうるのかを探ってみること、これが本稿の第二の目的である。

一、尹明斎という人物について

尹明斎は、日本の読者にはほとんど知られていない人物であるため、まずその生涯について簡単に触れておかねばならない。彼は朝鮮中期の儒学者で、学派的には畿湖学派[2]、政治的には西人系に属し、のちに少論の領袖となった。本貫は坡平、諱は拯、字は子仁・仁卿、号は明斎・西峰、諡号は文成である。

尹明斎が生きた当時の朝鮮は、国内外の情勢が急変する転換期にあった。朝鮮時代最大の国家的危機であった